死なない少年と死んだ国

相模御鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死なない少年と死んだ国

【Ｎコード】
Ｎ７４５６Ｚ

【作者名】
相模御鏡

【あらすじ】
１１００年の歴史を誇り６００万の信徒を擁する『人間』の組織、光言宗。数多くの不死者と人道を外れた呪術師で構成された『人外』の一団、大群。その二つの衝突が近づく中、死んでも死んでも死に切れない少年、球磨川禊はたった一つのスキルを駆使して、己の欲望を果たすために暗躍を始める――屍姫とめだかボックスが同じ世界線にあるという設定ですが、舞台はほとんど屍姫のものになります。オリジナル要素は少なめにするつもりです。

序

「ねェ……燻製と焼き肉なら、どっちが好き？」

振袖のように垂れた袖口から、十指に銀の指輪を嵌めた手が伸び、爆発を伴い炎を放った。遠く離れて見ているだけでも、チャイナ服の少女、リオン・リンがたった一人で他二人を圧倒しているのが分かる。

服についた木の葉を払いながら、学生服の少年、球磨川禊（くまがわ みそぎ）は楽しそうに笑っていた。リオンは、上半身こそ首と手首から先しか見えないが、下はうまく覗けば中身が見えそうな程短い。絶対領域を形成する黒のストッキングも、彼の劣情をそそった。

そして敵対している様子の――否、敵対できていたかは怪しいが、少なくとも相対はしていた二人組の、年上に見える女性の方も随分とまた際どい格好をしていた。法衣を思わせる羽織の下は、ビキニのような下着とショートパンツのみ。健全な男子高校生である禊が主に興味を持っていたのは、言うまでもなくこの二人だった。

しかし、おまけにと言えばいいのか、リオンが放った炎熱のお陰で、ノースリーブのセーラーを着ているもう一人の少女の長かったスカートまでもが焼けて短くなってしまっていた。

三人の女子の中へ今すぐにでも宝の山だと叫びながら飛び出したい禊だったが、彼が抱えている物を見られればおそらく、そこで戦っている三人ともを敵に回してしまうだろう。生まれながらの過負荷（じゃく はいしゃ）であり生きる過負荷（はいしゃ）でもある禊にとって、それは何としても避けるべき事態だった。

『それでも、まあ――』『過負荷（マイナス）である僕にあるまじき好機（プラス）だけど、これもさらなる堕落（マイナス）へのお導きだと思って』『ありがたく享受させて頂こうかな』

禊はへらへらと笑いながら、たった一人の少女が二人の女子を蹂躙する様を遠巻きに眺めていた。

1　毒牙

禊はできるだけ音を立てないように気を配りながら、猛火の拡がりに合わせて後退する。

彼の言うプラスには二つの意味があった。一つは見目麗しい女性一人と可愛らしい少女二人を好きなだけ眺められるということ。そしてもう一つは、数での有利に任せて勝利を収めるかと思っていた二人組が、森を焼きながら戦っている一人に押されていることだ。

隙の突き合いで勝たせるつもりはなかったが、一度に相対する数は少しでも少ない方がいい。一対一で、彼が抱えている『それ』と、さらに風に乗って聞こえたリオンの長所（じゃくてん）を利用すれば、引き分けに持ち込むことは容易いだろう。彼は勝利に嫌われていても、敗北に病み憑かれていても、引き分けまでなら手にできるのだから。

グラマーな女性が、もう一人の少女を庇った。庇われたとはいえ、せいぜい人間一人分の面積しかない壁だ。はみ出た金髪の先が炎に触れ、黒い粉に変わる。

段取りを脳内で再確認する内に、戦いは終わっていた。チャイナ服の少女は不満気に髪をいじりながら、倒れ伏す二人との距離を詰める。

セーラーの少女、異常な身体能力を誇り前衛で戦っていた方の少女は既に身体の修復が始まっているようだが、その少女を最後の一撃から庇った茶髪の女性は全身が真っ黒焦げになる程の火傷を負っていた。その武器である五本の長い長い爪も、すっかり破壊されてしまっている。

この女性の身体は余すところなく人間のものだ。この傷ではもう助からない。リオンはそう判断して、女性を放ったまま少女の方へと近付き、腹を踏みつけ、手を翳（かざ）した。再び彼女の手に嵌った指輪から、炎がちらつく。しかしその炎は酸素を喰らって肥大化することはできず、そのまま立ち消えることになる。

空虚を帯びた言葉がリオンを打ったからだ。
『あーあー』『まったく、もう』『酷いことするなあ』『まあ戻すからいいけど』
「な……ッ！？」
突然背後に現れた気配に驚き、リオンが振り向く。リオンと同じ黒髪で、彼女の知識の中では学ランと呼称される服を着た少年が、長い爪を使っていた女性、荒神莉花の身体に触れている。触れられた莉花の身体は、彼女が彼女であると認識できる程に回復していた。
火傷の痕が消えている。どころか、焼けた筈の服までもが再生している。リオンが自身の驚愕を理解する間にも、焼死を司る焚鬼によってつけられた傷は巻き戻るように修復されていく。
「お前……何をしてる！　お前は何者だ！　何処から来た！　如何してここにいる！」
怒りで動揺を包み隠し、怒号を浴びせる。目の前で女性に触れている少年は、焦りを隠し切れないリオンとは対照的に漫然と立ち上がる。そのゆらゆらした動作が、リオンに不快な印象を与えた。しかしその印象を噛み砕く暇もなく、さらなる驚きがリオンを襲う。
螺子が、通常より遥かに巨大な、小太刀くらいの大きさの螺子が、彼の両手に握られていた。
それも土の中にある鉄を集めて構成したとかそういう類の、理屈でこじつけられそうな現れ方ではなく、本当に忽然と出現したのだ。空間を掻き分けて、突如。空間を捩じ曲げて異空間から取り出したかのように。
幻覚系の能力を疑ってみようにも、これだけはっきりと禍々しく質量を持たれては疑いようがなかった。仮に幻覚だったとしても、この螺子は現実にさえ干渉してしまうのではないか。そんな疑念も鎌首をもたげ、次から次へと心という坩堝で疑惑の渦を成す。
張り付いた笑みが、おどろおどろしい螺子をリオンに向けて構える。
何が起こっているのか、大群の、言わば理解を超えた理外の集団

の教主を務めるリオン・リンにすら理解できなかった。彼女は彼女で、それなりに理を外れている自負があったが、しかしこれは例外が過ぎる。

彼、球磨川禊の使っている『大嘘憑き』という過負荷自体が本来、人智理解の範疇から排斥され物理法則の制約を無視した代物なのだが、教主である以前に僵屍仙であるリオンにとって、その理解できない力こそが、その世界に拠らない力だけが、自身の存在を脅かす力だった。

だから警戒した。彼女の全神経で禊を捉える。僅かでも禊が動けば禊を正面に据えて構え、荒神莉花と天瀬早季との戦いで崩れかけた焼死の指輪を含め、他の十の死の指輪を、余力を残しつつ解放する。

（余計な能力を使わせる前に――――殺す！　殺し尽くす！！）

結果を先に言ってしまえば、禊はリオンの隙を突いた。リオンの集中力と警戒心の間を縫って、だ。

隙を突かれる直前まで、リオンの瞳は死んでいなかった。いかに目の前の人間、あるいは屍が強かろうとも、自棄になりかかっても尚。もちろん、自分の十の死の鉄壁は決して崩されることはないという自信もあったのだろう。

さらに言えば、どれだけの能力を持っていようが、禊の武器が螺子であったこと、彼女にとって見慣れたものをただ巨大化させただけのものであったこと、それが彼女の心に生まれた隙を加速させた。

そして。

『質問が多いなあ』『リオンちゃんは』

球磨川禊という少年は、ありとあらゆる弱点を知り尽くしている。リオンの自信が生んだ油断を、そんな彼が見逃す筈はなかった。

彼の過負荷は、彼女の呪いの下を、悠然と掻い潜った。

それは、ハードルは高ければ高い程潜り易い、という言葉の体現のようだった。

「な、あ、え……？　嘘……」焼死、凍死、感電死、撲死、斬

死、餓死、病死、毒死、溺死（窒息死）、圧死という十の死を各々が司っていた銀の指輪は、一瞬にして易々と貫かれている。
それでいて、リオンの手には傷一つない。背後に転がる十の螺子が、確かに彼女の十死の指輪を砕き、彼女の十指を貫いた筈なのだ。
『まず一つ目の質問だけどー、僕はただ単に僕のスキルを行使しただけだよ』『「大嘘憑き」っていうんだけどね』
禊は肩を竦めて掌を広げ、にこにことしたまま語り始めた。
無論、リオンにその話を聞く余裕はない。自分の無敵を保証した指輪が破壊されてしまったのだ。何より彼は、何もない空間から螺子を出現させる能力があるようだった。そしてそれは幻覚ではなく、少なくとも彼女の十の死の指輪に干渉できる程の質量を持った存在であることが、ここで証明されてしまった。まさか、またさっきと同じように、同じことができるのではないか？　もしできるならどうなるか。
今、彼女の十指に、指輪は、ない。
そこまで考えてから、リオンははっとしたように禊を見た。へらへらと笑うその顔が、どこまでも傍若無人に映った。が。
『そして第二』『僕は球磨川禊』『健全で負完全な過負荷（マイナス）の極値を名乗らせてもらってる、一介の男子高校生さ』
彼の身体は細身で、服の上からでも脆弱さが見てとれる。こんな脆弱にすら、隙を突かれれば、自分は、こんなにも、脆い。そして弱い。どちらが脆弱だ。誰が無敵だ。『誰の敵として扱おうにも不足する』という意味では、この男だって無敵ではないか。
（私は――どっちだ？）
虚勢の怒りを込めて禊を睨みつけてみても、向かう所敵無しの少年はびくりともしない。
『三の巻は簡単明瞭、この近所の住宅街に僕の家がひっそり佇んでいたというだけだよ』『物珍しさでこんな所へ立ち入れてしまうくらい近くにね』『さて、残る最後の一つへの回答だけど』
禊がリオンの双眸を見つめて、一つ呼吸をした。

（来る――！！）
『それは』
すっ、と。
『ここに倒れている彼女と、僕との距離を「なかったこと」にしたからだ。』
十メートルは離れていた距離を、一歩も動いたように見えないまま禊が詰めて見せた。
否、それよりも――
「ひ、い！？」
『こんな風にぐふぅ！？』恐怖のあまり、リオンが禊の腹を蹴り飛ばす。ただそれだけで、柔な鍛え方すらしていない彼の身体は倒れた莉花の上を越え、焼け焦げた木へと衝突する。背中からごきりと嫌な音がして、ぐたりとした身体がそのまま地に落ちた。
しかしリオンの表情は硬直したままだ。
たった一瞬。ただの一瞬の出来事だった。
――ただ唐突に距離を詰めただけの禊の表情が、それを間近で見たリオンの脳裏へと刷り込まれた。
日本に来る前も、日本に来てからも、様々な人間を殺したし、色々な屍を狩った。蜃や仙狸の幻術には心底驚いたし、火烏や火鼠には可愛いという思いを浮かばせてもみた。のっぺらぼうや海坊主にはその木偶の坊振りに呆れ、製作者を殺した現場に居合わせたことのある麒麟や牛魔王に関しては、斃した後でその不格好さに腹を抱えて転げてしまった経験もある。
しかしこれは、そのどれとも違う。
生きている人間の身体に、屍の未練と妄執を放り込んでしまったような、矛盾を孕んだ悍ましさがあった。
そして自分が蹴り飛ばした男は、たった今致命的な音を鳴らした筈の背中をさすりながら、立ち上がった。
「あ……い、嫌！　どうしてよっ！　何で、今、だってお前は、お前の背中はッ！！」

折れた筈の背中を指差そうと右腕を持ち上げる。震える指の示す先は、背中どころか禊の身体をすらはっきり掠められずに空中を漂う。

焦りがリオンの心を支配する。今、彼女の手に指輪はない。今また距離を詰められ、先程と同じように螺子を刺されたら。

蹴り飛ばしたばかりの相手に竦んでいる。立ち竦むことしかできないでいる。

「嫌……っ、どうして……」

『……痛いじゃないかリオンちゃん！　ちょっと近付いただけなのに、何てことをするんだい！？』

禊の表情を見て、リオンが尻もちをつく。未練に囚われ死に切れなかった存在ならいくらでも見てきた。だが、こいつはそれらとは別の異形だ。何度も自分に言い聞かせてしまう。言い聞かせれば言い聞かせる程自分の首を締めてしまうというのに。人間はおろか、屍や屍姫ですら、こんな風になっているのは見たことがない。

声とは全く無関係の表情。感情が読み取れないばかりか、一方的にこちらの感情を汲み取られているような錯覚。自分の臓物（はらわた）を鷲掴みにでもされたかのような気分で、眩暈と吐き気がリオンを襲った。

禊は一歩ずつ、今度はそのスキルによって距離を詰めることなく、彼女を追い詰めるようにゆっくりと、屍の少女へと近付いた。

（死にたくない。死にたくない、死にたくない。死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！！）

「ご、ごめんなさい！」

引きつった笑みを浮かべて、涙を流して、リオンは助命を願った。

まだ生きていたい。生きて、楽しいことをして、面白いことをしたい。それだけを願って、リオンは過負荷（マイナス）・球磨川禊に対して命を乞うた。禊はまだ、足を止めない。

「な、何でもするから！！　何でもする！！　だからお願い！　殺さないで！！」

目から流れ切れない涙が鼻へと逃げていき、鼻水のように彼女の唇に垂れる。くしゃくしゃの泣き顔を前にしても、禊はまだ、足を止めない。

『大丈夫だよリオンちゃん』『きみの涙も嗚咽も弱音も』『僕がぜーんぶなかったことにしてあげるから！』

彼の湛える不鮮明な笑みが濁った視界を通じてリオンに届く。彼の放った不気味な言葉が鼓膜を通じてリオンに届く。最早、禊が笑っているのかなど関係なかった。禊が何と言っているのかも気にしていられなかった。リオンは只々謝り続ける。

しかし禊は、リオンの目の前に立つと、すっと手を差し出した。右手を、握手を求めるように、彼女の眼前へ。

「お、おねが、い……」

眼球でも潰されると思っていたのだろう、彼女が一度閉じた目を開くまでに数秒を要したが、彼はその間もずっと状況に不似合いな笑みを消すことなく、気味悪い気配を振り撒き続ける。

『そこまで言うなら、そうだなあ』『うーんと、そうだ！』『僕と正々堂々対等な立場で、公明正大に取引でもするとしようか』

禊は言い放った。一切の代償を求めず自己の権利すら投げ打った少女に対して、彼は改めて取引という名の命令を持ちかけた。

従わなければ殺される。そんな前提で取引も何もあったものではないが、彼はあえて取引という言葉を用いた。

『こちらからは三つ』『きみの命を助けることと』『僕がついこの間、きみ達から拝借した屍法姫経典（しほうききょうてん）とかいう書物の引渡し』『そして僕の「大嘘憑き」による、きみの十の死の指輪の回帰』『破格の条件だと思うぜ』『さらに、きみからの条件は、そうだなあ』『可愛い女の子への骨折り大サービスということで』『たった一つで構わないよ』

希代の最弱、球磨川禊は、光言宗（こうごんしゅう）と大群という二つの巨大に対し、一つ目の毒牙を、小さくも確実に突き立てる。

『僕の屍姫になって欲しいんだ』

2　大嘘憑き

人の死と共に生まれる、人間の生への未練。その未練によって活動する動く死体（リビング・デッド）を、屍と呼ぶ。そしてその屍の内、屍法姫経典（しほうききょてん）に記された技法で光言宗の僧侶と契約を交わし、屍を殺すために戦う少女を屍姫と呼ぶ。さらに、屍姫は契約相手に関するいくつかの制約を受ける。

その他、屍についての一通りと、屍姫についての一通り。

禊が知っている屍についての知識は、こんなものだった。あとは先程の『実戦』を見て、屍でなくとも扱える特殊技法と屍が特有する特殊能力があるらしいことを知ったくらいだ。

これだけ知っていれば充分なのかもしれないが、この必要最低限を除いて、他には何もない。球磨川禊という少年が面白半分なのか本気なのか巫山戯（ふざけ）ているのかは分からないが、そんな知識量でこの世界へ飛び込んできたことだけはどうしても気に食わなかった。

「……ありがとう」

そんな気に食わない禊の手を、握るしかなかった自分にもまた、嫌気が差す。にも関わらず、彼女は禊に礼を言った。あくまで社交辞令の域を出ないものだったが。

『礼には及ばないさ』『その代わり、きみと僕、そしてこれから引き抜いてくるつもりの奴ら』『つまり僕達の名乗る組織名は僕に決めさせてもらうぜ』

嫌な予感しかしない言葉を遮る暇も与えず、禊は堂々を胸を張って宣言する。

『その名も「裸エプロン同盟」！！』

「はぁっ！？」

契約を終えた禊の言葉に、悍ましさや恐ろしさは含まれていない。何もなかった。彼の言葉は誰の心も揺らせないし、だからこそ彼の心は誰にも揺られないのだろう。それ故に、リオンも普段通りの姿

で禊に接することができる。
「ちょっと、もうちょっとマシな名前に……」『盟主はもちろん僕！』『目的はまだ明かせないけど』『いざ！　二人で一緒に未来を築こう！！』
普段通りの姿で接することができるのだが、自分の言葉を気にも留めずに嬉々として裸エプロン同盟といういかがわしい名前の組織について語る姿に呆れ、ほんの少し禊から距離を取る。
彼がそうしたのと同じように、彼女も禊の言葉を無視し、自分の手を握ったり開いたりして、自分が終わっていないことを実感する。唐突にリオンの肩に禊の手が乗った。再び彼女の手に戻った十死の指輪を使えば、こんな至近距離でなら彼を殺すことも可能だっただろうが、既に彼女は球磨川禊という契約者を得てしまっている。
彼が死んだだけで、リオンまでも死に至る。契約者から離れると回復能力が落ちるという欠点（マイナス）だけは彼女の呪い（プラス）によって相殺できるが、禊の死だけはどうにもならないだろう。それに類する話で、リオンは普段の彼の余りの弱々しさを気にしていた。
「……死なないでよ」
その辺でたむろしている不良の一人にすら死敗（しはい）を喫しそうな薄弱ぶりを全く包み隠そうともしない少年を見て、リオンが呟く。それに対して禊は、満面の笑顔でこう答えた。
『うわあー！　こんな可愛い子にこんなお願いされちゃうなんて！』
『こりゃ迂闊に死ねないね！』
親指を立てた拳をリオンに向ける。苛立ちに任せて禊を蹴り飛ばしそうになったが、今度も彼の上下半身がきっちり繋がったままで吹き飛ぶとも限らないので、ギリギリのところで踏み止まった。
と、
「お前らは何時（いつ）まで茶番劇を続けてるんだ？」
黒い礼服と黒死の匂いを身に纏い、ヴードゥーの邪術師（ボコール）、『人形使い』ロギア・C・ギュスターヴが現れた。
リオンが目を見開く。ロギアに背を向けている形になっている禊

も、初対面の時と同じように緩慢な動作で振り向こうとする。
その首を、イェンという名を与えられたロギアのお気(にんぎょう)に入りが圧し折った。リオンの蹴りで背中を木にぶつけた時よりずっと酷い音がして、禊は成されるがままに崩れ落ちる。同時に、リオンの身体も力なくへたり込んだ。
「あ……？」
ぐたりと横たわる禊を見る。歩くまでもなく近い距離なのに、永劫触れられないような久遠に感じる。二人の間に繋がっていた『縁』が失せてしまったのだ。地獄を眼前にして垂らされた蜘蛛の糸は、リオンが掴んだ瞬間に、垂らした者の意志も掴んだ者の意志も関係なく事切れた。
「？　おい、何やってんだよ、行くぞ。……」
ロギアが待つ。しかしリオンは立てない。当然だ。彼女は今、契約者を失った屍姫という、どうしようもなく脆弱な立場にしかいないのだから。
「……おい、イェン！　そいつを立たせてやれ。なんかよく分かんねーけど腰でも抜けたみたいだ」
待ちかねたロギアが不審な表情でリオンを見遣る。大群(おおぜいのけがれ)の擁するもう一人の人間、鹿堂赤紗(ししどうあかしゃ)ならば二人が契約した所を見て、警戒心と敵愾心を双方へ向けることもできたのだろうが、こちらの男は光言宗にはほとんど無関係だ。
その鹿堂赤紗でも、禊が生き返り、立ち上がり、牙を剥くなどとは到底思えなかっただろうが。
『……』
リオンにとっても意外なことだった。自分の死まで『なかったこと』にできるとは、彼女も思ってはいなかった。
突然湧き上がった言い知れぬ恐怖に、ロギアの心が戦慄する。少年を模して作った人形(イェン)の身体が、ロギアの思考と連動するかのように動きを止めた。
『誰だよお前』『男女が二人っきりでいい雰囲気になってるってい

うのに、何の考えもなく邪魔をしにきたのかい？』『だとしたらきみは、僕のこの手で不幸を味わわされるべき逸材（ワルモノ）だぜ』『だから』

『――――』

その不気味さが禊から放たれたものだと知るやいなや、即断、冷や汗と共にロギアが後ずさる。黒のシルクハットが頭を離れて地に落ちたが、ロギアにそれを気にしている余裕はなかった。そしてリオンは、そんな禊の背をただ見つめることしかできなかった。

「おい、リオン！　斬死でも撲死でも何でもいい！　とっとと十の死でそいつをぶち殺せ！　こいつはヤバい！」

片眼鏡を貫き、ロギアの眼孔を螺子が抉る。その動きを、イェンとリオンは固まったまま眺めているだけだった。

こんな死に方は、まだマシな方だ。私は十の死で、数多の人間を殺してきたのだから。

こんな殺し方よりも、ずっと酷いやり方で。

『人の話は最後まで聞けよ、これだから週間少年ジャンプを読まない連中は。』

振り返る禊に襲い掛かろうとしたイェンを、リオンの圧死が叩き潰した。

上半身と下半身が見事に分かたれて、これでは斬死と見分けがつかない。

『おっと、ありがとうリオンちゃん』『でもお連れの彼らも来ちゃったことだし』『仕方ないや、今日はこの辺でお別れするしかないかな』

禊は事も無げにリオンに手を振る。リオンと擦れ違う瞬間にも、友人に対して「また明日」とでも言っているような気軽さだった。

契約を終えてすぐに嬉しそうな顔で裸エプロン同盟について語っていた時のように、今の彼には邪術師（ロギア）を怯えさせた不気味さも、教主（リオン）の心を折った悍ましさもない。

『続きはまた今度』『ね』

リオンの視線の先では、確かに頭蓋へ突き刺さった筈の螺子が、

倒れたロギアの頭のすぐ脇で、地面に突き立っていた。
「何よ、これ……」
振り向いた禊は、擦れ違ったばかりのリオンの頭を撫でて言う。
『あれ、確か言ってなかったっけ？』『僕の過負荷（スキル）、「大嘘憑き（オールフィクション）」だよ』
平然と。
『現実（すべて）を虚構（なかったこと）にする――』『たとえば全身に負った火傷（げんじつ）を』『たとえば二人の距離（げんじつ）を』『たとえば礼服の彼が見た記憶（げんじつ）を』『あらゆる事実をあまねく真実を虚無の彼方へ帰してしまう』『それが僕の「大嘘憑き」だ』
イェンの頭からぐしゃりと音がしたかと思うと、裁断された筈の胴体はきちんと繋がり、またしても顔のすぐ横に螺子が突き刺さっていた。
「そんなの、そんなの……ッ！！」途方も無い能力を聞かされて、そして漏れそうになった声を抑える。
たとえば、『呪い』も？
それを聞いてしまえば、それに答えられてしまえば、本当に取り返しがつかなくなるような気がして、リオンは必死に言葉を封じ込めた。
リオンの不安を払おうとしてか、禊は屈託の無い（ように見える）笑顔で話しかける。
『だから安心してよ』『きみがいくら「呪い」を使っても』『僕の霊気（ルン）が減ったという現実をなかったことにして、無尽蔵にスタミナを供給してあげられるからさ』
的外れな返答に、リオンは溜息をつく。しかし、期待に沿わない返答は、リオンの心を軽くもした。
「そう、なんだ。私の呪いは制限されることなく使える。そうなんだ」
話が逸れたことで、再び重圧に折れて曲がりそうだった心が、平静を取り戻す。一度折れ目のついてしまったものを元に戻すことは

できないが、彼女の心を圧し折ったのは球磨川禊という男ただ一人だし、その男は既に、彼女の味方だった。
彼女が従属するという形ではあるが、彼は確かに彼女の味方に違いない。
（……筈、よね）
「禊、あなたは……私の味方なんだよね？」
疑念を拭うように問い掛ける。
『味方どころかこれから一生を共にするんだぜ！』『最早、伴侶と言って差し支えない程さ！！』
また嬉々とした表情で、禊が言う。本当にこの男は自分が僵屍仙（きょうしせん）という存在であることを分かっているのだろうかと、笑いが漏れた。
リオンの心は、それを折って砕いた張本人によって、より強く繋ぎ直された。記憶をなかったことにして何度やり直してでも、ほぼ万全に近い状態のリオンを仲間に引き入れるという禊の算段は、こうして一度の失敗をも経験することなく成功した。
「そう。そうよね。あなたが私の味方。球磨川禊が、私の味方」
リオンが、死んだ――わけではなく、気絶してしているだけのロギアに近寄る。
『ん』『その通り』『僕がきみの味方で、きみが僕の味方だ』
証拠を残さないように自分の放った螺子を全て回収しつつ、禊はリオンに声をかける。
『それじゃあ僕はこの辺でお暇するよ』『それと』『いくら霊気（ルン）が無尽蔵だといっても、指輪の修復までは自由にできるわけじゃないんだから』『あんまり無理しちゃ駄目だぜー！』
お茶目な雰囲気のままで、球磨川禊は踵を返す。
歩き出した禊の姿が見えなくなるまで、リオンはその背中を目に焼き付けていた。

3　研修生

「高峰猊下」

光言宗総本山の霊安室で、高峰と呼ばれた年配の僧は苦虫を噛み潰したような顔で報告を受けていた。ここには現在、四十一の棺が運び込まれている。扉が開き、最後の棺を抱えた二人組の僧が入ってきた。

高峰宗現。光言宗開祖と共に死者の世界から現世を守り教えを広めた十人の高弟達の血族、『偉家十聖』高峰家の出自で、現在は光言宗内の現場主義派閥『修法派』を支える僧正である。

六僧正としての職務の他、”最強”の屍姫として名高い轟旗神佳の契約僧としても一線で活躍している。

「荒神権僧正の捜索は現地の者に任せるとして、研修生の方々は如何いたしましょう？」

「……研修生？」

高峰が険しい顔をした。どうやら報告に上がっている僧は一度告げていたようで、一瞬だけ戸惑った顔をしたが、すぐに手に持った紙へ視線を落とし、読み上げようとした。

高峰も少し疲れを感じながらではあるが、すまない、と断って報告に耳を傾けようとした。

その時。

「！　痛っ！」「……どうした？」

高峰を探してやってきた神佳が霊安室に入るか入らないかというところで、一人の僧が声を上げた。

四十二個目の棺を運んでいた男だ。神佳を除く全員がその男に注目し、神佳だけが、棺の中から這いずり出す何かを見た。

「――っ！！」

瞬間、他の全員の意識が空白する中、神佳は刀を握り、棺から飛び出した屍を斬り裂くために駆け出した。

血飛沫が舞う。
神佳の斬撃がすんでのところで止まり、振り抜きかけた剣筋の先には、グローブを嵌めた腕があった。
「おっと、悪ぃ悪ぃ。邪魔しちまったか？」
屍の頭を潰した色黒の男が笑いかける。確かに少年と言える程小さくはないのだが――彼らをここまで連れてきた神佳と、高峰にその情報を取り次ぐ筈だった僧だけはこの大男に見える少年が高校生であることを知っていた。
「いやーそれにしても、俺の反射神経についてくるとはやるじゃねえの。俺の方が一歩速かったみたいだけどな」
色黒の少年の後ろから、髪を後ろで縛った仏頂面の少年と、髑髏のネックレスを付けた『威風堂々』という言葉がひどく似合いそうな少年、それから、それぞれ仮面に防寒着、包帯とマントという風体で性別の分からない二人が遠慮する様子もなく入ってくる。屍とはいえ人間の姿をした存在の脳天を一撃で砕き割ったこの少年といい、刀を腰に提げた少年に、顔にナイフを突き刺した少年（？）、徹底した防寒振りで見ているこちらが暑くなる少年（？）と、指輪を嵌め両耳にピアスを付けた尊大の塊のような少年が可愛らしく見える程だ。
「個性的な面々だな。……研修生、というのは」
高峰の顔が曇るのを待っていたかのように、、
「あー、こっちにもいまーす」頭上から声がした。
入ってきた五人以外が驚いて上を向く。
そこには、分厚い服を着た目付きの悪い子供と、その後ろ襟を掴んだまま天井を歩いているやたら露出度の高い少女の姿があった。そう、その少女はまさしく天井を歩いていると言って差し支えなかった。周囲の視線が釘付けになっている間にも、ブーツを履いたまま左足を一歩、右足を一歩、と交互に踏み出し、高峰の真上へと近付いてくる。
高峰が顰めた眉の間を指で叩く。神佳は神佳で平然と佇んではい

るが、僅かに殺気立っているようだ。
頭上を取られたのが気に障ったのだろうか。
「……高峰様。研修生七名、到着なさいました」
神佳が不承不承といった感じで紹介すると、高峰の顔が一層険しくなった。
「研修だと。こんな時に？　平常時ならともかく、まして今は大群との緊張状態が続いているんだぞ。大僧正様も何をお考えで……巫山戯るのも大概にしてくれよ……屍の対処だけでも頭が痛いというのに」
高峰のイメージしている『研修』とは、平凡な学生が平和な日本社会を学習するために見学しに来るというものだ。今この時に来られては、そんな平凡も平和も台無しになってしまう。高峰は小さく「こんな高校生達にトラウマを植え付けろというのか」とぼやいた。
しかし高峰に対して、尊大な少年が返答する。
「肩書きに惑わされて力量を測り損なうとはな。まあ相手が見ただけで分かる程の格を見せつけられなんだ俺にも落ち度はあるが、しかし偉大なる俺を前にその不遜な物言いは頂けんな。――とりあえず、ひざ」絶対的な威圧感を纏った少年の言葉は、チリッ、という微かな音と同時に放たれかけた電流と共に鳴りを潜め、神佳の剣閃が少年の髪を僅かだけ短くした。
色黒の少年が零した速ぇな、という一言にも眉一つ動かさず、眼鏡の奥の怜悧な瞳が都城王土を見据える。
「……見た所、ここにいる屍姫は貴女一人のようですが。僕達七人を相手取って勝算でもあるんですか？」
どこから取り出したのか、腰に提げた刀はそのまま、新たな二刀の切っ先を挑発的に向けているのは、仏頂面の宗像形という少年だ。包帯の少年（？）が距離を取ると、彼（？）との間に割り込むように天井に立っていた少女が降りてきた。掴まれていた子供も、着地してすぐに懐に手を突っ込み、何やら仕掛けようとしている。
各々が思い思いに臨戦の構えを取る中、仮面の少年（？）行橋未

造が倒れた。
「ガスを散布しようとしていたようなので、眠らされる前に眠って頂きました」
神佳が説明する瞬間を隙と見做して斬りかかった宗像の剣撃は目もくれられることなくその尽くを受け止められ、宗像自身もそのまま力任せに弾き飛ばされる。自動操縦とまで称される自慢の反射神経を持つ男はグローブを使って丁寧に宗像を受け止める。間断なく露出狂紛いの格好をした古賀いたみが突進すると、神佳はそれを受けずに躱し、すれ違い様に脇から蹴りを入れた。高千穂仕草は反射神経だけでは受け切れない威力と判断し、いたみを躱して神佳に拳撃を繰り出す。感覚神経から直に運動神経へ、反射神経に任せた連続攻撃を、神佳はやはり柄と鍔だけで受け切り――一瞬だけ高千穂へと向きを変え、その鳩尾へと一撃を叩き込んだ。
高千穂の身体が宙を舞う。
その一瞬を突いて、王土が動く。逃すまいと反転した神佳の視界に、きらりと光るものが映った。
（注射器――？）
何が入っているのかも定かでないそれを躱そうとした神佳の身体が止まる。神佳の身体を捕らえたのは、包帯の少年（？）名瀬夭歌の放った注射器とは別に、身動きの取りにくそうな服を着た雲仙冥利の張り巡らせた見えない檻だった。
不格好なまでに分厚い彼の服――風紀委員会特服『白虎』を縫製しているのと同じ『アリアドネ』という糸を利用した『鋼糸玉』。一本あたり五トンを支える科学技術を、雲仙冥利の異常な器用さで使いこなして生まれる最高峰の檻、『霞網』。
神佳の周囲から、ぎしりと音がする。
「ケケケ！　そいつに捕まって動ける奴なんざいねぇよ、ボケ！」
広い場所で支柱となる物が少なかったとはいえ、かなりの本数の糸が神佳の間合いを侵犯している筈だ。そして身体を捕らえられたことをはっきりと理解するまでの数瞬の間に、名瀬の放った注射器

が神佳に届く。
「ぐ、」
腹部と頸部に走る痛みに顔を歪めて、しかし神佳は二人には目もくれず、その視線は、王土の唇を見据えていた。
「跪け。」
その言葉に、王土を含めた研修生七名と鋼の檻に閉じ込められていた神佳を除く、その場の全員が跪いた。王土に服従でも誓ったかのように。
「ほう？　それなりに本気で圧政をかけたつもりだったが、少し足りなかったか？」
「いえ、効きましたよ。恐ろしい程の圧力です」
神佳の周囲の空気が解放と緊迫で満たされる。科学力と異常度の織り成す極地とはいえ、所詮は糸の集合。対するは人ならざるモノを斬ることにかけては右に出る者のいない、”最強”の屍姫、轟旗神佳である。王土が言葉を放った一瞬は、彼女が束縛から解放されるには十二分だった。
刀を構えた一瞬の内に、再び王土が圧政を振るう。
「――平伏せ」
王土の言葉に神佳の身体が崩れかかり、神佳の刀が王土の皮膚をなぞった。髑髏のネックレスが床に落ちる。
「……ふはっ！　素晴らしいな、屍姫。これほどの強さならば俺達が来る必要などなかったやもしれん」
危うく自分の首を切り落とされるところだったというのに、首元の血を拭きもせず王土は豪快に笑う。神佳は彼を無視して、革命したダメージによって血みどろになっている左足を引きずりつつも高峰の傍へ寄った。
「高峰様、大丈夫ですか？」
「ああ……心配には及ばん。しかし七人がかりとはいえ、お前が人間を傷つけざるを得んとはな」
高峰は立ち上がると、既に銘々自分の身だしなみを整えている六

人と、倒れている行橋を順繰りに眺めた。
「先程は申し訳なかった。確かに私は、あなた方の力量を見誤っていた。改めてお願いしよう。光言宗に力を貸して欲しい」
他の返事を聞きもせず、やはり王土が笑う。
「ふっ、偉大なる俺が承知しよう。これより箱庭学園の『十三組の十三人』より選出された研修生七名が光言宗に力を貸すぞ」
王土の号令と共に（行橋だけは電撃により強制的に立たされて）研修生としてやって来た七人が並び立つ。
壮観と言うべきこの状況で、高峰が疑問を投げかけた。
「……十三人？　七人しかいないようだが。他に六人いるのか？」
「ああ、そいつらは後から……実際はともかく、予定としては来ることになってるぜ。何せ異常度が飛び抜け過ぎて十三組の中でも浮いちまう程の奴らだからなー、本当に来るかどうかは運次第だろうな」
冥利がフォローを入れると、王土がそれを鼻で笑う。
「ふん、奴らは来ないだろうな。ま、しかし、不知火理事長は滅多矢鱈に山磨市へ生徒を送り込みたいようだが。要は俺が大群を蹴散らし教主を蹴散らし、そして傲岸不遜にも『王』を名乗っている死に損ないの屍を斃せば良いのだろう？　何、余計な奴らを待つ必要もなく、簡単なことだ」
王土が腕を組んで神佳に背を向ける。
「顔合わせはこのくらいで充分だろう。まあ、こちらの地理やらの勝手は知らんからな。俺達は光言宗の都合に合わせて手駒として動いてやって構わんぞ。何なら今すぐにでも根城へ突っ込みたいくらいだが、それも流石に貴様らの面目が立ちそうにないからな――準備が整うまでは待っておいてやろう」
王土が扉を出ると、それに続いて研修生全員が霊安室から立ち去った。
高峰と神佳を含め、他の僧達全員が、彼らが出ていくのを呆然と

眺めることしか出来なかった。あれより異常度の大きい人間が六人もいると聞いて、腰が抜けてしまった者もいるらしかった。
「高峰様……彼らは人間ですよ？　それも、この国の次代を担う高校生です。よろしいのですか？」
「構わん、としか言えんよ……歯痒いが、な。戦力は少しでも多い方が良い。としか言いようがない」
神佳はやはり不満そうだ。それ程に若者を戦略的に数えるのが心苦しいのだろう。
しかし、高峰の表情は、それよりもさらに昏（くら）かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7456z/

死なない少年と死んだ国

2012年1月4日05時52分発行